様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月３日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９５１０２４４
研究課題名（和文）　出羽山形の地域特性の歴史的展開に関する基礎的研究―山形地域史の再構築―
研究課題名（英文）　The Fundamental Studies on the Regional Characteristics of Dewa Province―The Reestablishment of the Regional History in Yamagata―

研究代表者
岩田　浩太郎（IWATA KOTARO）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：30184881

研究成果の概要：
出羽山形の地域特性の歴史的展開に関する共同研究を、まず(1)出羽内陸発展論、(2)地域自己認識論、(3)奥羽宗教信仰圏論、(4)「奥羽の商都」論、を立てて各メンバーが分担し、その上で共同により古代より産業革命以前までの通史的な考察をおこなう方法により実施した。その結果、山形を中心とする出羽南域内陸地方（山形県村山地方）は高度な経済発展を遂げており、それを基盤に都市的な発展もみられ政治・宗教文化の諸活動が活発におこなわれた地域特性を有することをあきらかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,600,000	480,000	2,080,000
２００８年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：東アジア、地域史、奥羽、都市、宗教、出土文字資料、口承文芸、商業

１．研究開始当初の背景
本研究は、山形県史事業が終了し県が地域史・地域学研究を推進する体制が弱まっているという状況に鑑み、山形大学がその研究推進センターとしての役割を長期的に果たしていくことが求められているという地域社会の情勢をふまえて計画された。従来の山形地域史をとらえ直す際のいくつかの視座を把握し、「山形学」など山形県における地域史・地域学研究への貢献のための基礎を築くことを課題とした。
平成１６年度より山形大学人文学部より研究活動支援経費を受けて継続したプロジェクト研究が基礎となり本研究の前提となった。

２．研究の目的
本研究は、山形県村山地方の地域特性の歴史的な形成・展開について、その条件となった地域の内在的発展や全国および東北各地との広域的な交易・交流をふまえて考察することを研究の目的とした。主に産業革命以前の各時代（古代・中世・近世・近代）における歴史事象のなかから地域特性の形成に関

わる問題群を選定し、まず各メンバーが実証研究を推進する。それを基礎に、共同研究会や学外市民に開かれた成果報告会・シンポジウムを開催し、メンバー以外の研究者にも参加いただきながら、通史的な視野により出羽南域内陸地方（山形県村山地方）の地域特性に関する全体的な考察を進めることを目的とした。

３．研究の方法

本研究の期間を２年間とし、第１年度はＡ山形伝統都市研究、第２年度はＢ山形地域特性研究、を中心に実施すると当初は計画したが、補欠後の採択により結果として研究期間が１年半に短縮されたため、第１年度の課題を絞り込み、第２年度のＢ山形地域特性研究がメインとなった。各メンバーが(1)出羽内陸発展論、(2)地域自己認識論、(3)奥羽宗教信仰圏論、(4)「奥羽の商都」論、を分担し、その成果をふまえて古代より産業革命までの通史的な考察をおこなう方法により本研究を実施した。各メンバーは山形県をはじめ南東北を中心としたフィールドワークを実施し、地域史料の発掘と保存に努め、地域の旧家・郷土史家・郷土史研究団体・地域市民との関係づくりをさらに進めることを重視した。また、山形史学研究会会長の伊藤清郎氏に本研究の研究協力者を委嘱し、５回実施した研究会（各メンバーの個別報告・公開。於山形大学）に参加いただき報告・助言を得た。

４．研究成果

成果につき以下、**分担研究**と**通史的把握**と**公開発表**とにわけて述べる。

分担研究

(1)出羽内陸発展論及び古代出羽国府の研究（担当:三上喜孝を中心に）

出土文字資料の解読を通じて、古代・中世期の出羽南域の北方・南方との経済的文化的交流の様相を考察し、出羽国府の成立・移転の基盤や背景に関わる検討を深めた。また、戦国・江戸初期の巡礼者の地域間交流に関する補足研究も実施した。さらに、山形県内の９世紀の集落遺跡（南陽市加藤屋敷遺跡、同市百刈田遺跡、鶴岡市行司免遺跡、同市興屋川原遺跡）から出土した墨書土器 100 余点を調査し、９世紀の地方社会における集落の性格と文字の使用の意味について考察した。また、酒田市亀ヶ崎城出土木簡の調査、検討を行い、16 世紀末における当該地域の地域間交流の実態を考察した。

(2) 地域自己認識論（担当:菊地仁を中心に）

出羽南域における〈炭焼き藤太伝説〉〈西行伝説〉の各流布の実態と変容過程を考察し、そこにおける地域アイデンティティのありかを探った。また、出羽の地方軍記『奥羽永慶軍記』を素材に、対関東意識の一面につき検討した。さらに、民間説話や在地伝説など、主に山形県北部における口頭伝承を素材として、地域の自己認識の系譜を探るべく、『明光寺盛衰記』や『新庄古老覚書』の基礎的な調査研究を行なった。また、その関連で、山形県における口承文芸の特徴的なあり方を示す一事例として、〈花咲爺〉の話型を通時的ならびに共時的な観点から分析した。

(3)奥羽宗教信仰圏論（担当:松尾剛次を中心に）

鶴岡市立図書館蔵羽黒山玉蔵坊文書の整理と目録作成を実施した。この結果、羽黒修験の中世～近世における東日本を覆う諸活動や霞の実態を解明した。また山形城下八日町宝光院文書の整理と目録整理をおこない、文殊菩薩騎獅刺繍像と最上家との関係などの考察を進めた。総じて、中世・近世期の奥羽宗教信仰圏の構造につき知見を深めた。妻帯している修験者の筆頭である真田玉蔵坊文書（800 点程）については仮文書目録の作成と文書の写真撮影の作業を完了した。宝光院については、宝光院で「発見」した文殊騎獅像の修復を行い、それを踏まえて宗教史的な分析を行った。

(4)「奥羽の商都」論及び山形城下町の研究（担当:岩田浩太郎を中心に）

山形城下中心部の十日町の巨大紅花商人であったマルチョウ長谷川吉郎治家の史料を発掘し、その成長過程と商業活動を考察した。幕末維新期に山形の最大の商人であった同家の奥羽にひろがる商業網を検討し、同家が「奥羽ノ大坂」という自己及び他者認識を得ていたこと、都市山形が「奥羽の商都」として位置付いていたことを指摘した。さらに、山形城下町商人および村山郡豪農商の広域的な商業金融活動に関する実証研究を進めた。とくに、奥州村田、出羽秋田・横手、武州上尾などの紅花産地に対する山形商人の取引実態などに関する古文書調査を進めた。また関連研究として、紅花生産地帯の農業構造の分析を河北町谷地を事例に実施した。

通史的把握

出羽南域内陸＝村山地方は、奥羽（東北）のなかでは降雪の少ない恵まれた自然的地理的条件により地域の生産力が高く、明治期の稲作生産力は東北の中ではわずかに庄内地方とともに全国平均を越える水準にあった。その背景には古代中世以来の地域生産力の発展があり、近世期における稲作改

良と畑作特産物生産（紅花・青苧・煙草・桑作養蚕など）の展開の歴史が指摘できる。また、環日本海の交流および日本海運・最上川舟運などの条件も相まって、古代出羽国府の内陸移転は従来説よりも早い９世紀末以降の段階で実現された可能性も考えられ、さらに奥羽のなかでは早い 11 世紀前半には摂関家領を中心に荘園の成立が広範にみられた。こうした政治的経済的な発展を基礎に、立石寺・慈恩寺・出羽三山などの宗教文化的な活動も奥羽のなかでは顕著に展開され、とくにこれまで未解明であった中世羽黒修験の霞組織は東日本各地に組織化されその勢力が東日本を覆っていたことの実証研究を進めることができた。出羽南域内陸＝村山地方のこうした政治的経済的宗教文化的な条件は都市形成にも結実し、古代出羽国府の内陸移転や中世奥羽の管領探題職を一時期掌握した斯波氏の山形城などの諸段階を経て、最上家 57 万石の拠点としての山形城郭・城下町建設に至る。近世初頭の山形城郭・城下町は当時奥羽有数の大城郭・大都市であったと推察でき、出羽南域内陸＝村山地方の歴史的発展の所産と評価できる。それは、斯波氏の高権を継承し徳川家より「奥羽の押さえ」として期待された最上家の自己意識を象徴するものでもあった。最上氏改易後、武家人口は減少するが、近世中期以降の山形城下町は、地方民間需要の成長に支えられたいわば「奥羽の商都」として広域的な商圏をもつ奥羽有数の中継商業地として発展していったと評価でき、従来不明であった繁栄の実態を検証することができた。その基盤には奥羽内陸部に深く入り込み他に例を見ないほど整備され活況を呈した最上川舟運などの近世交通体系や紅花・青苧による上方との直接取引により山形商人が奥羽のなかでは抜きんでた全国商業＝金融網を構築しえていたなどの条件があった。同時に、山形城下町は奥羽の宗教拠点として諸寺院が集中配置され、また出羽三山信仰の参詣拠点としても盛況を呈した。近世の出羽南域内陸＝村山地方は従来譜代大名の左遷地ないし全国所領配置の石高調整地＝「非領国」化した不安定地としてみられてきたが、むしろ最北の幕府直轄地が存在しかつ譜代大名領が集中する「奥羽の押さえ」の地として、同じく高生産力地帯であった庄内地方とともに公儀が重視した地域として把握すべきである。明治期に大久保利通による東北開発構想を受けて三島通庸が山形に初代県令として送り込まれてきたのも、当該地域の経済発展をはじめ歴史的な蓄積を掌握しなければ東北開発が着手できなかったからであったと考えられる。明治 10 年代に東北・北海道開発や外圧＝軍事海防論の観点から帝都の内陸遷都が議論された際に民間知識人が山形を一候補として主張したのは暴論ではなく、出羽南域内陸＝村山地方の歴史的発展に現実的な根拠を置くものであった。その後、明治国家による太平洋側の社会資本整備を中心とする経済政策や交通体系再編により山形の地位は大きく変化し、いわゆる「米と繭の農業構造」に対応する産業＝商業機能に編成替えされ、近代が作り出した東北イメージを典型的に体現する地域となっていくが、産業革命期にいたるまで山形はその活発な経済文化活動により奥羽（東北）における物流交易・宗教文化交流などの拠点として位置付いていた。これらの歴史的遺産は、現在の村山地域の人々の、いわゆる藩領国地域における「藩風」とは異なる開放進取の気質をはじめ、東北のなかでは革新的な山形商法の伝統、高度に発達した地主豪農商の旧家文化、出羽三山・立石寺などの宗教文化、紅苧織の伝統を引き継ぐ地場産業、海産物を取り込んだ内陸食文化、祭り芸能や教育を含む地域民俗文化の伝統など、今日にも様々な形で残され、山形の歴史風土を形づくり影響を与え続けているととらえられる。

公開発表

200 名規模の公開学術報告会を２回開催した。(1)「交流史からみた山形―山形地域史の再構築―」、2007 年 10 月 20 日、於山形大学、(2)「修復記念 文殊騎獅像講演会」（一般展示公開も開催）、2008 年６月７日、於山形大学。

また、本研究における各分担研究成果の一部につき、『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第６号（2009 年８月刊）誌上で特集「地域史研究と資料・方法の開拓」を組み論文４本を掲載・発表した（本報告書作成時は入稿時点。掲載決定済み）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１１件）

①岩田浩太郎、地租改正期の農業構造に関する基礎データの検討―山形県村山地方の立附米調査の史料的考察－、山形大学大学院社会文化システム研究科紀要、第６号、(2009)、査読有

②菊地仁、山形における〈花咲か爺〉の話型―昔話「赤いこん箱（屁ひり爺）」が提起する問題―、山形大学大学院社会文化システム研究科紀要、第６号、(2009)、査読有

③松尾剛次、山形市宝光院と文殊菩薩騎獅像、山形大学大学院社会文化システム研究科紀要、第６号、(2009)、査読有

④三上喜孝、中近世の仏堂墨書と地域社会―天童市若松寺観音堂墨書の調査をふまえて―、山形大学大学院社会文化システム研究科紀要、第６号、(2009)、査読有
⑤岩田浩太郎、河北地方の地主制の発達と農民、河北の歴史と文化、第５号、pp.41～76、(2009)、査読無
⑥岩田浩太郎、山形長谷川家の商業活動―「奥羽の商都」の巨大紅花商人―、山形大学歴史・地理・人類学論集、第９号、pp.65～93、(2008)、査読有
⑦岩田浩太郎、巨大紅花商人―山形の長谷川家について―、山形郷土史研究協議会研究資料集、第30号、pp.5～41、(2008)、査読無
⑧松尾剛次、宝光院文書と宝光院文書目録、山形大学大学院社会文化システム研究科紀要、第４号、pp.51～101、(2008)、査読有
⑨三上喜孝、仏堂墨書の世界―天童市岩松寺観音堂の墨書から―、天童市若松寺観音堂墨書調査報告書、pp.60～76、(2008)、査読無
⑩菊地仁、草より出でて草にこそ入れ―〈武蔵野〉の意匠―、伝承文学研究、第 56 号、pp.33～43、(2007)、査読有
⑪三上喜孝、「境界世界」の特産物と古代国家―北方・南方世界との交流―、歴史と地理（日本史の研究)、第217号、pp.1～16、(2007)、査読無

〔学会発表〕(計８件)
①岩田浩太郎、河北地方の地主制の発達と農民、平成20年度「山形学」地域連携講座「河北の歴史と文化を探る」(河北郷土史研究会主催)、2008年10月19日、サハトベに花交流室
②松尾剛次、宝光院と文殊騎獅像、山形大学人文学部プロジェクト研究「修復記念 文殊騎獅像講演会」、2008年6月7日、山形大学
③松尾剛次、羽黒修験の中世史研究―新発見の中世史料を中心に―、山形地域史研究協議会総会、2008年4月12日、山形市中央公民館
④岩田浩太郎、巨大紅花商人―山形の長谷川家について―、山形地域史研究協議会新春報告会、2008年1月12日、山形市中央公民館
⑤岩田浩太郎、山形長谷川家の商業活動―「奥羽の商都」の巨大紅花商人―、山形大学人文学部プロジェクト研究公開学術報告会「交流史からみた山形―山形地域史の再構築―」、2007年10月20日、山形大学
⑥松尾剛次、羽黒修験と中世奥羽―新史料からみた出羽三山史―、同上「交流史からみた山形」、2007年10月20日、山形大学
⑦菊地仁、炭焼き藤太伝説の伝播と変容―奥羽文化交流の一様相―、同上「交流史からみた山形」、2007年10月20日、山形大学
⑧三上喜孝、出土木簡が語る出羽山形の交流史―県内資料を中心に―、同上「交流史からみた山形」、2007年10月20日、山形大学

〔図書〕(計１件)
①松尾剛次、法蔵館、山をおりた親鸞 都をすてた道元―中世の都市と遁世―、(2009)、201p

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
山形大学人文学部プロジェクト研究「出羽山形の地域特性と交流圏に関する歴史文化研究－山形地域史の再構築－」の活動紹介
http://www-h.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/ke_project.htm

６．研究組織
(1)研究代表者
岩田　浩太郎（IWATA KOTARO）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号30184881

(2)研究分担者
菊地　仁（KIKUCHI HITOSHI）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号50125762
松尾　剛次（MATUO KENJI）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号30143077
三上　喜孝（MIKAMI YOSHITAKA）
山形大学・人文学部・准教授
研究者番号10331290

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
伊藤　清郎（ITO KIYOO）
山形大学・地域教育文化学部・教授
研究者番号70113925